

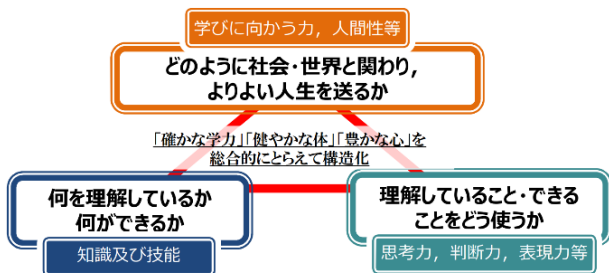
新課程における『主体的に学習に取り組む態度』の評価について

愛媛県立松山北高等学校 泉 亮太
愛媛県立松山中央高等学校 石川 巧
愛媛県立新居浜東高等学校 天羽 平

1 はじめに

令和4年度入学生より新学習指導要領となり、これまでの4つの観点「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」から、3つの観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に整理された。それに伴い、「観点別学習状況の評価」、いわゆる「観点別評価」が導入され、今年度は2年目となった。特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、各学校で様々な評価方法を実践しながら、試行錯誤の段階が続いている状況ではないだろうか。

昨年度末で観点別評価の1年目が終わり、各学校で1年間を通して様々な実践を行ってきた。その中で、見えてきたメリットやデメリット等についてアンケートを実施することで、各校の現状を把握して、今後の学習評価の改善に役立てればと考えて、研究の主題とした。



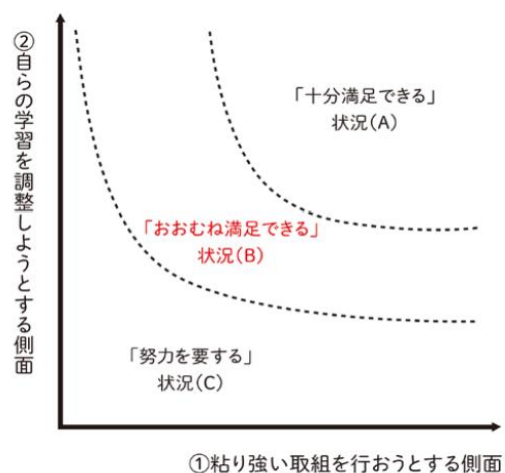
2 文部科学省資料「新高等学校学習指導要領と学習評価の改善について」より

これまでの学習評価の課題として、「学期末や学年末など事後の評価に終始してしまうことが多く、評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない」「教師によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくい」などの指摘があり、以下のように「学習評価の基本的な方向性」が示された。

- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

特に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた『粘り強い取組』の中で、『自らの学習を調整しようとしているかどうか』を含めて評価する」とされている。また、「知識・技能や思考・判断・表現の観点の状況を踏まえた上で評価を行う」とされており、他の観点から切り離して評価することは適切でないとのことである。

これらの内容が、実際に評価をする上で各校が試行錯誤しながら、頭を悩まされている一つであると考えられる。各学校で昨年度、観点別評価を1年間実施しての実情について共有したい。



3 アンケートの集計結果について

アンケートについては、校務系アンケート機能を利用し、主に県内県立学校と中等教育学校に依頼した。以下のデータについては回答にご協力していただいた 59 校のものであるが、記述式の回答についてはすべてを原文のまま掲載できていないことなどをご了承いただきたい。

【設問 1】

観点別評価において、メリットだと感じることは何ですか。

ア. 生徒側のメリット

- ・生徒の自主学習への創意工夫が期待できる。
 - ・正しい評価方法ではないかもしれないが、日頃の学習態度等も評価に含めることで、苦手だと感じる生徒にも評価できる部分がある。
 - ・生徒目線に立つと自分自身の分析がしやすく、目標が立てやすい。
 - ・生徒と教員がそれぞれの観点を意識した学びや指導を心掛けることができる。
 - ・教員側も生徒側も、自分の取組みを点数のみではなく、詳しく理解でき、その後の活動に生かすことができる。
 - ・生徒の個別具体的な成長への方向が明示される。
 - ・生徒の学習改善や教師の指導改善につながるものにしていく共通認識ができる。
 - ・生徒からの視点で考えると、自分がどの観点が弱いのか把握することができる。
 - ・学習の定着度合いの把握による学習活動の改善・観点別に評価されることで、自分の優れている点、改善点を把握することができる。
 - ・自主ノートを提出したり、自ら発表したりと、生徒たち本人からも主体的に学ばないといけないという気持ちが芽生えてくると思う。
 - ・生徒が自身の成績について具体的に理解できる。
- ・どの観点に課題があるかを生徒自身が把握しやすくなっている点。考査の振り返りや学習に対する意欲につながっているように感じる。
 - ・各単元において
 - ① 成果が出ていて継続すること
 - ② 解決・改善すべき課題
 - ③ 次に取り組むことを生徒自身が振り返ることで、成長に繋げることができる。

イ. 教員側のメリット

- ・生徒がどの観点を得意とし、苦手としているかが数値で判断することができる。
- ・ペーパーテストの点数だけでなく、生徒の一人一人の日頃の努力や日々の授業での取組等を総合的に評価できる。
- ・総合評価については項目を決めにくいとは感じるが、観点別評価によって項目がはっきりする。
- ・普段の授業やテストで観点別評価を意識するようになった。
- ・観点別評価のための作問をすることで、以前よりも生徒が各単元のどの部分において苦手意識を抱いているのかが分かるようになった。また、それに対応できる指導を意識するようになった。
- ・以前の点数での評価と比較して、細かく生徒を評価するようになった。
- ・その教科、科目における生徒自身の改善すべき点を伝えることができる。
- ・これまで慣行として行われてきたものでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していき意識が高まる。
- ・評価についての妥当性、説明責任が担保される。
- ・学年で統一した評価ができる。
- ・他校へ異動になっても評価基準があると授業のレベルや進度が分かりやすい。
- ・計画的な指導・評価を行うための指標となる。

- ・ いわゆる難問（思考力等）と基本的な質問（知識等）を明確に分割して評価することができる。
- ・ 努力してもテストで点がとれない生徒を救いやすくなる。
- ・ 生徒の学習活動や学力を多面的に評価することができる。 今までは、生徒の学習成果を「知識・技能」で測ることがほとんどであったが、「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の側面から生徒の学習活動を見ることができる。
- ・ 様々な評価物から総合的に評価できるため、正確に生徒の評価ができる。
- ・ 思考力の育成のための問題作成や授業改善などで、教員の授業力の向上や意識の改善ができています。
- ・ 教員が生徒の定着具合について細かく把握することができる。 また、何ができていないのが、保護者等にも伝わりやすい。
- ・ 観点により目標をクリアしていない苦手生徒へ目が向けやすくなった。
- ・ 評価するために、細々とした積み重ねが必要となる。 そのため、注意して生徒を見ることができる。
- ・ 生徒の到達度に応じた指導が実施できる。
- ・ 各観点で評価項目や規準がきちんと確立しているなら有効であると思う。
- ・ 生徒の様々な活動を評価できる。
- ・ 今までの評価の仕方にこだわらずに、今の時代に合わせた評価の仕方を考える機会になっている と思います。観点別評価自体のメリットは正直あまり感じていません。
- ・ 細かい評価で常に評価のことについて考えることが、指導と評価の一体化につながるのではないか。
- ・ 「知識・技能」と「思考・判断・表現」の2観点について、考査等を評価の指標に含めているが、各問題をどちらの観点にするのかという点で、客観性に欠けると感じる。
- ・ 上記のメリットを生かすようにするためには、綿密に計画を立て、相互理解の徹底が必要だと感じる。 たとえば、「知識・理解」の観点はこのように評価しましたので、今後改善して下さいと生徒側が評価を細かく理解していないといけないので、その手間がかかる。また、綿密に計画を立てないと評価のブレが起きやすいように感じる。
- ・ 考査の割合が低くなってしまい、考査への意識が低くなることや評価方法により、高い評定がつきにくい可能性があること。
- ・ 下位の生徒も出にくい、上位の生徒も出にくい平均的な評価になってしまうこと。 差がつけにくいこと。
- ・ 各評価について、何をどのような割合で評価をするか、主観が大きくなる。
- ・ 3観点をABCで評価するのですが、知識・理解と主体的な態度はリンクすることが多い。 しかし、実際の評価の時、知識・理解はCだけど、主体的な態度はAになっている生徒がいるのではないかと。 そちらあたりの評価の一致が少し難しいと感じます。また、教職員の負担がより一層、増した気がする。
- ・ 場合によっては、ここにはない観点が必要な場合があるかもしれない。
- ・ 評価に手間がかかる。 ただし、40人分を全く異なる評価にしないのなら、かなり手間が省ける。
- ・ 観点別評価のための指導・授業になってしまうことが多々ある。 成績処理が煩雑になったため、教員の手間が増えた。 「主体的に学習に取り組む態度」は考査の点数で評価できないため、教科担当間での意識の共有が以前よりも大事となるが、どうしても教員毎の評価にずれが生じてしまう。
- ・ 客観的な評価ができていないか疑問に思う。

【設問2】

観点別評価において、デメリットだと感じることは何ですか

ア. 評価の規準について

- ・担当教員に迎合する生徒を育成することになっていないか心配である。
- ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、客観性を保つことが難しい。
- ・レポートや調べ学習の成果物となると、それにかかる時間数の確保が難しい。「主体的に学習に取り組む態度」を評価するときの規準があいまいで、教員によって評価が異なる。
- ・3つの観点のうち「知識・技能」の評価が、他の2観点の評価の土台になっているため、「知識・技能」の評価が低くなると他の観点の評価も低くなり、総合的に成績が低くなる。
- ・主体的に取り組む態度の評価が難しい。本校生には、主体的評価がCで残りがAという個性の生徒が存在しているが、実際にはAACという評価をつけることは不可能で、そのへんにこの観点別評価の正当性に疑問を感じている。高校より先の進学や就職に関して、この観点別評価がどれほど評価されるのかが知りたい。
- ・「知識・技能」と「思考・判断・表現」の難易度に差が大きくなってしまう。(評価がAとCになる場合がある。)
- ・学校や学科の実態に応じて、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の分別が難しい。
- ・主体的に学習に取り組む態度の評価方法が難しい点。生徒の理解度に合わせて評価方法を現在教科内で検討している。
- ・観点別評価は、客観性に乏しく、相対評価になれていた人間にとってはかなり違和感を感じる部分が存在するのは確かだと感じている。また、教師1人1人に指導力や人間力、スキルが必要となる評価であるため、それを実現できるだけの研修機会が設けられていないこともよくない点だと感じている。

イ. 評価の方法について

- ・観点別評価と5段階評定での整合性の確認など、

手間が増えている。

- ・従来の評価と比べ、3観点に向けての評価に用いるものの点の配分、各平均点の調整が複雑である。
- ・評価項目が細かくなり手間がかかる。各学期に複数の単元を学習した場合もまとめて評価することになるので改善点が見えにくくなる。
- ・今までの授業の活動に加え、生徒の活動についてさらに注意深く記録を取る必要が出てきたので、仕事量が増えた。3観点到に相関関係はあると思うが、九九も十分でない生徒が高校で気持ちを切り替え頑張っている場合、観点別評価内にAとCが混在することがあるが、この評価が良くないと指摘される。生徒のありのままの努力を評価したい。
- ・仕事量の増加。(働き方改革に逆行)
- ・評価の計算段階で、評価要素が多いためミスをする可能性が高くなっている。かつ、ミスのチェック機能が働きにくい状態になっている。
- ・機械的にABCが付いてしまい、気持ちは前向きでも考査や小テストで点がとれない生徒は結局しんどいところ。
- ・生徒のためではなく、評価のための小テストや課題等になってしまいうところ。
- ・毎時間細かくチェックしたり頻繁に提出物や小テストをしたりすると、教員の多忙化につながるところ。
- ・日々の指導の記録や、学期末のまとめ、入力作業など評価に関する作業が激増している。評価のための指導という感じがする。かならずしも予定通り授業は進まないのが計画通りになりにくい。他校では、観点別評価がネックになって、講師が見つかりにくい(ベテラン講師がしり込みする)という話を聞いたことがある。
- ・評価が面倒である。知識・技能と思考・判断・表現とに問題を振り分けることや、観点ごとに点数を記録すること。主体的に学習に取り組む態度の評価方法など。観点ごとにABCの3段階と、100点法の評定の両方を出しているため、整合性

があるかのチェック，など。

- ・「思考力・判断力・表現力」の考查問題には，作成に時間がかかる。また，考查時の正答率も低く，期末考查の評価「ABC」で「C」の生徒が多くなる。また，考查以外での評価方法や機会の確保が難しい。
- ・評価は数字で決められるものではない場合が多い。提出回数や発表回数など数えるなどデータを収集して評価する必要がある。
- ・高校のような単元の内容が密なもので観点別評価をしても生徒の学習状況や成績に影響があるとは思えない。
- ・観点別評価の在り方について教員の理解が十分でないため，誤った理解をしている教員や，従来の方法に似た評価を行う教員がいる。
- ・100点法と併用する際に，平均点の規準に合わせづらい。また，評点の計算に時間がかかる。
- ・細かく評価をすることになると，その分非常に多くの時間がかかること。また，それだけの時間に見合った効果がないように感じる。
- ・手間がかかる。本校の観点別評価の方法では，単純計算で従来の3倍の手間がかかります。
- ・評価ありきのテストとなり，生徒の学びと丁寧に向き合いにくい。
- ・これまでテストの結果によっては，平常点で調整できていたところがあるが，観点別評価だとそれが難しい。
- ・ABCと点数，評定の確認に時間と手間がかかる。
- ・作業が増える。評価や褒章に対して改定が必要となる。
- ・デメリットではないが，一つの観点だけ秀でるような生徒は本校にはほぼいないのでメリットを感じられない。
- ・生徒の本当の力（テストでの点数）が図りにくいと感じる。
- ・これまで以上に教科間，学校間の違いが起こり，統一性はない。

【設問3】

「主体的に学習に取り組む態度」の評価には何を
用いていますか。

回答内容	合計
小テスト	5
単元テスト	2
ノートや授業プリント	8
課題（日々の課題や週末課題など）	8
課題（パフォーマンス課題など）	2
レポート	2
プレゼンテーションなどの発表	2
授業での行動観察	8
生徒による自己評価	3
生徒による相互評価	0

【設問4】

設問3の選択肢以外で，評価に用いているものがあればお答え下さい。

- ・きちんと出席をして授業を受けること。
- ・定期考查に10点分主体性を見る問題を話し合っ
て出題している。
- ・テストについて，生徒の成長を読み取り参考
にしている。
- ・授業の振り返り（反省・感想）を記述させる。
- ・先日の教育課程研修会の総則部会で，「主体的
に学習に取り組む態度」の評価は「知識・技能」と「思
考・表現・判断」の裏付けがあった上で，それら
を生かして学習に取り組むことを前提としている
から，「主体的に学習に取り組む姿勢」がAで，他
の観点のいずれか一方でもCのような評価はあり
得ないというように，教育委員会と研究発表者か

ら指摘があった。そうすると根本的に評価の方法等の見直しが必要でないかと考えている。

- ・課題が主になっている。また、主体的に学習に取り組む態度は、知識・理解や思考力などにもリンクしているので、他の2観点の評価も参照している。

【設問5】

設問3における参考資料について

- ・傍用問題集の問題やチャート式の参考書の例題をプリントして週末課題にしていた。
- ・レポートに関しては、夏季休業中の課題として、興味のある数学の分野とその歴史的人物が発見した公式をA4（1枚）にまとめてくる課題を実施した。
- ・例えば、数学Aにおいて、「6人をA部屋に1人B部屋に2人、C部屋に3人とする分け方と6人を1人2人3人に分ける分け方の総数は等しいが、A部屋に2人B部屋に2人C部屋に2人と2人2人2人と分ける分け方の総数は違うこのことを数値と言葉を用いて説明せよ」とレポート課題を出した。うまく評価はできなかった。
- ・数研出版の教科書の「深める」についての記述などを課題とした。
- ・質問の解答に沿うものかどうかわからないが、前任校で冬休みの課題で「関連のありそうな2つの変数を見つけて相関係数を求めて考察してください」というレポートを出させたことがある。「牛乳を飲めば背が高くなる」が本当かどうかを、都道府県の牛乳消費量と高校1年生の身長の相関係数を調べてまとめた生徒がいて、結構面白かった。
- ・長期休業中に、1年生には「自分が生活する中でまだ数学と結び付けられていない事柄を数学とつなげて説明しなさい」という課題を出している。こちらの予想以上に面白いレポートが挙がってきた。また2年生には（今年初めて）「自分が受ける

理系以外の授業でまだ数学と結び付けられていない事柄を数学とつなげて説明しなさい」という課題を出している。

- ・自己評価は、考査の最後に「考査までに主体的に取り組んだこと」について記述させている。
- ・まだ実施はできていないが、現在、EILSを活用して課題を配信し、実施状況や実施後の振り返りを評価に入れようと検討している。

3 アンケート結果から

(1) 観点別評価を実施して

「観点別評価を実施して感じたメリット」として多かったものは、「自分の優れている点、改善点が具体的に分析できて、学習の改善につながる」「生徒の弱点が具体的に目立って授業や指導の改善につながる」といった、生徒の学習改善、教師の授業改善に関する意見であった。特に、単元テストや定期考査で「知識・技能」と「思考・判断・表現」が問題ごとに明記されることで、生徒は基礎の知識・技能が身に付いていないのか、基礎は身に付いているがそれを表現する力が身に付いていないのかが点数で現れ、次の学習方法の改善にはつながっていくと期待できる。また教師も、授業のポイントや考査問題作成など改めて考えさせられる部分が多かったようである。

逆に「観点別評価を実施して感じたデメリット」としては、「多忙化」という意見が多数であった。生徒の行動観察・記録の時間、考査問題作成のための時間、成績処理の時間など、細かく観点が分かれた分、教員の負担は明らかに増えた。特に昨年度は、評価規準の作成や成績処理なども含めて常に手探りの状態で、これまでと比べてはるかに多くの時間を必要とした。今後、各学校でシステムが定着していくと、少しは負担が減ると思うが、それでもこれまでよりは評価に時間を費やすことにはなるであろう。

また、その他として、「各教員の主観が入ってしまう」「成績が中央により、上位も下位も出にくくなる」

「観点別評価と評定の整合性」「評価のAとCが混在することがあるが、それはよくないとされている」

「校内の平均点規準や褒章規定の見直し」などの意見が複数あった。これまでの評価と大きく異なることで、校内での不具合が出てきているのが現状である。「これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと（指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料・国立教育政策研究所）」と述べられているように、数学科だけでなく、学校全体で時代に合わせて変更していく時期なのだと感じた。

(2) 「主体的に学習に取り組む態度」について

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、各学校で最も苦勞されていることが昨年度アンケート結果からも見てとれる。これまで通りの「小テスト」「課題」「行動観察」や、「レポートやプレゼンテーション」「振り返りなど自己評価」を行い、点数化しているようである。また、教科書の「深める」「課題学習」「総合問題」や「E I L S」など既存のものをうまく活用して評価に活用している学校もある。しかし、中にはうまく数値で評価できない部分もあるようで、評価規準の見直しなどまだまだ試行錯誤は必要である。各学校で評価方法や教材の共有などでできれば、少しでも負担は減るのではないか。

また、実際に評価を行うと、「AAC」や「CCA」といったAとCが共存するケースが出てきている現状がある。「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「知識・技能や思考・判断・表現の観点の状況を踏まえた上で評価を行う（指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料・国立教育政策研究所）」とはあるが、実際には、そういった生徒が存在しているため、評価規準の調整などを今後も見直しながら考えていかなければならない。

4 おわりに

昨年度、「観点別評価」の初年度が実施され、今年

度は1・2年生が観点別評価を行っている最中である。これまでと異なる点が多く、実際に関わっている先生方は、評価にかなりの時間を費やしていることであろう。実際に評価をしていく中で、昨年度からの改善点、新たな問題点などが出てきているところだろう。校内だけでなく、他校とも情報交換をしながら、少しずつ先生方の負担が軽減されていくことを期待したい。そして、客観性のある評価を行うためには、数学科だけでなく学校全体で共通理解の上で取り組んでいく課題でもある。

来年度は、高校1年生から3年生までの全学年が観点別評価となり、さらに新課程における大学入学共通テストも実施される。現在の高校2年生は、進路決定に向けて未確定な部分や不明な点も多い。そういった不安を少しでも取り除けるように、研究部でも情報収集や情報共有の助力となるようにしたい。

最後になりましたが、多忙な中でのアンケート調査へのご協力、丁寧な御回答、御意見をいただき本当にありがとうございました。研究部では、今後も研究を重ねていく所存ですので、研究テーマの要望など各先生方から幅広い御意見をお寄せいただいたら幸いです。

(参考資料)

「高等学校学習指導要領（平成30年告示）

解説 数学編 理数編」（文部科学省）

「「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）」（国立教育政策研究所）